

Nagano Prefectural Museum of History

長野県立歴史館たより

2022年 冬号 vol.113

特集—冬季企画展

高遠藩の遺産  最後の藩主が残したもの

令和4年度
冬季企画展

高遠藩の遺産

—最後の藩主が残したもの—



今年度の冬季企画展では、幕末の高遠藩を取り上げます。およそ150年前、高遠藩の最後の藩主であった内藤頼直^{よりなお}が、上京する間際に高遠に残していった武具や道具類。内藤頼直の治世時に開校した高遠藩校・進徳館から輩出され明治時代に活躍した人材。本展は高遠藩が残したモノや人材に注目し、焦点をあてる展示です。ここでは主な展示品を紹介します。

①「高藩探勝」全三巻

上・中・下の三巻からなる絵巻物です。いずれも長さが10m前後もあります。藩主が、高遠藩領内の景色をひとり占めすることを惜しみ、広く人びとに知らせるために作らせたものです。



高藩探勝 下巻 郭上鶴^{かくじょうのつる}
(伊那市立高遠町歴史博物館蔵)

全部で52の景観が色彩豊かに描かれ、砂浴びをする馬や猿回しの猿に吠える犬など、生き生きとした動物たちも登場します。また、それぞれの景観に、金箔に書かれた画題と和歌が添えられています。1743（寛保3）年に完成しました。江戸時代の高遠藩の様子が分かる貴重な資料として、2008（平成20）年に伊那市指定文化財となっています。3巻とも期間中場面を替えながらの展示となりますが、明治維新以前の高遠藩の景観をご覧いただければと思います。

②星野^{しとみ}菰^も宛内藤^{しとみ}従五位書状

廃藩置県後、内藤頼直は新しく藩知事となりましたが、1871（明治4）年には高遠藩が高遠県となり、更に、高遠県は筑摩県に編入されたため、頼直は知事の任を解かれ上京を命じられます。それに伴い、頼直は旧藩士らに礼状を送りました。

この礼状を送られた星野^{しとみ}菰^もとは、藩の要職を務め、藩校・進徳館では助教として子弟の教育にあたった藩士・星野純政^{じゆんせい}のことです。



星野菰宛内藤従五位書状
(伊那市立高遠町歴史博物館蔵)

礼状の中で頼直は、「今後は新政府に従うように」と諭しています。本展示では、純政宛て以外に藩士・武井久平宛てのものも展示します。個人宅で大切に保管されてきたもので傷みがほとんどなく、初めて公に出るものです。同じように、現在も個人で保管され続けている「お殿様からの拝領品」がまだ存在するのではないかと考えます。

③高遠城図（城地周辺鳥瞰図）



高遠城図（城地周辺鳥瞰図）部分
(伊那市立高遠町図書館蔵)

高遠城の様子を大観できるこの絵図の作者は、高遠出身の日本画家、池上秀花^{しゅうか}・秀畝^{しゅうほ}親子のどち

らかと考えられています。

二ノ丸内に「御馬屋」の文字が書かれ、隣に鳥居が描かれています。これが厩^{うまや}稲荷であると考えられ、本殿や関係する奉納品類が、藩の御厩小頭であった小田切伊左衛門に下賜されたことが分かっています。

また、その他にも城内に1つの鳥居と社殿、2つの鳥居と社殿が描かれており、1つの鳥居と社殿の方は笹曲輪^{ささくわ}の稲荷、2つの鳥居と社殿は勘助稲荷であると考えられ、高遠城内には複数の稲荷があったことが分かります。

④鈴

高遠城内にあった厩稲荷の本殿や奉納品類を下賜された小田切伊左衛門の子孫にあたる個人宅で代々大切に守ってきたものの一つです。鈴本体の上半分に「奉納 御厩稲荷 文政三庚辰年 二月八日」と刻まれており、高遠城内にあった厩稲荷の奉納品であることが明確です。もともと本殿・上家の正面に吊るされていたものと見られます。



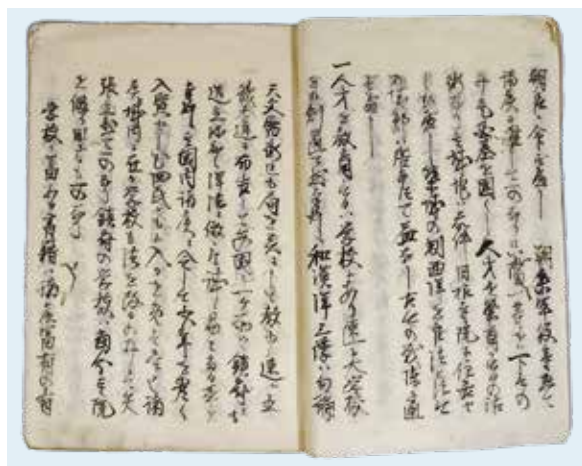
鈴（個人蔵）

⑤黒水先生明治元年十二月太政官へ奉リシ建白書

中村元起（黒水）が太政官へ提出した学校設立についての建白書です。

中村元起は、医師であり高遠藩の藩儒であった中村元恒^{もとつね}の次男です。35歳の時、昌平坂学問所で朱子学を学び多くの学者と接しました。とくに、昌平坂学問所の儒官であった佐藤一斎からは、陽明学や実学の重要性を教えられました。元起は、師^{ふくさい}の林復斎に、藩学を振興させたいという思いを伝え、助力を願いました。当時の高遠藩は財政難

によって藩校設立の余裕がありませんでしたが、内藤頼直の治世となってから、1860（万延元）年、設立が実現しました。これが進徳館です。はじめは三ノ丸学問所と呼ばれましたが、後に林学斎（復斎の次男）によって「進徳館」と命名されました。現在でも進徳館の入り口に掲げられている「進徳館」の額も学斎の書によるもので、進徳館という名前は、易経の「君子進徳脩業 忠信 所以進徳」（立派な人となるためには徳を進め業を修めなければならない。忠信は徳を進めるために大事な心構えである）が由来となっています。進徳館において元祖は文学師範を務め、進徳館閉校後は、筑摩県に出仕し公学校の設立に尽力し開智学校（松本市）設立にもかかわりました。



黒水先生明治元年十二月太政官へ奉リシ建白書
(伊那市創造館蔵)

なぜ多くの武具や道具類が残ったのか。なぜ進徳館から多くの人材が輩出し、今も進徳館は大切にされるのか。その背景には、明治維新という大きな変動期とともに生きた人びとの思いや努力があったと考えます。現在にもつながる人びとの思いや努力について展示を通してお伝えできたらと思います。（河野智枝）

Information

会 期 2023(令和5)年1月14日(出)～2月26日(日)
会館時間 午前9時～午後4時(入館は3時半まで)
休 館 日 毎週月曜日、2月24日(金)
観 覧 料 企画展のみ300円(大学生150円)
高校生以下は無料。
講座聴講は講座券(300円)または
共通観覧券(500円)が必要

木造校舎とその教室

～郷愁誘う大正時代の建築～



県立歴史館常設展示室

当館の常設展示室の近現代の一部には、「大正期の学校の教室」が復元されています。ここに使われている床板や、黒板、机、腰掛などの調度品、そして顕微鏡や織物見本などの教材類は、いずれも開館に先立ち、信州新町（現長野市）教育委員会からご寄贈いただいた資料群です。中でも、文字通り「黒い」黒板や、二人掛の机など、懐かしく思い出される方も多いようです。

これらが実際に使われていた学校が、信州新町立津和小学校です。惜しいことに同校は1992（平成4）年3月に閉校となり、さらに2年後には校舎も取り壊され、現存していません。

実は、こうした例は全国的にも数多く、昭和末から平成にかけての数十年間に、多くの小学校が閉校となり、その結果木造校舎も失われました。長野県内では、古間小学校（信濃町）、田立小学校（南木曾町）など、例外的に現存する校舎も、多くは閉校により校舎の主である学校が存在しません（津和小学校もその一例でした）。同じ校庭内に現校舎と木造校舎が共存している美簗小学校（伊那市）などは、稀有な事例といえるでしょう。

津和小学校の歴史は古く、1889（明治22）年に津和尋常小学校として創立されました。尋常高等小学校時代の1922（大正11）年、木造2階建ての校舎が新築され、これが閉校時まで使われています。同校はその後、制度の変更や町村の合併にともない幾たびかの変遷を経て、戦後の1955（昭和30）年信州新町立となりました。一方、過疎化により児童数は年々減少し、1992（平成4）年、惜しまれつつその歴史を閉じました（当時の全校生徒数は51名）。創立100周年を祝ってから、

わずか2年余り後のことでした。3月22日の閉校式は、「学校がなくなるさびしさから、全体的にしんみりした雰囲気が進められ」たようです（『広報信州新町』444号）。

なお、校舎はその後2年半ほど存続しますが、1994（平成6）年いよいよ取り壊しが決定、8月には、解体に先立ち「旧津和小学校お別れ会」が開催されました。当日は卒業生など70名あまりが参加し、はじめに全員で校舎内外の清掃を行ったあと体育館に集合し、「すいとんを食べながら、学舎でのなつかしい思い出を語り合」ったといいます（前掲誌473号）。



信州新町立津和小学校

（平成3年、モノクロームプリント、上林弘子氏撮影／石川孝氏提供、当館蔵）

上の写真は、県内78校の木造校舎を収録した写真集『校庭』（石川孝編・上林弘子撮影、平成7年）のための1点で、解体前の津和小学校の雄姿を記録した貴重な1枚です。夏空の下、深い山を背にした木造校舎を正面からとらえています。撮影には8×10インチ判（約20×25cm、通称エイト・バイ・テン）の大型カメラが使用されました。さすがに8×10判の描写力は圧倒的で、豊かな諧調による青空と雲とのコントラスト、外壁の板材などディテールを忠実に再現する解像度など、最新のデジタル写真と比べてもまったく遜色ありません。

一方、広々とした校庭を前面に配置しているため校舎との適度な距離感が生じて、どこか淡々とした表現となっています。モノクロームであることも、過度な感情移入を排除するのに一役買っているように思われます。

残された写真と、当館の復元展示を通して、今は失われた木造校舎とその内部空間へ思いを巡らせてみてはいかがでしょうか。（林誠）



当館所蔵の塩尻市^{うえきど}上木戸遺跡の縄文時代中期の釣手土器の底に、直径5mmほどの小孔があります。土器を焼く前にあけた孔で、3つは貫通しており、2つは孔を開けた後に内面から粘土を詰めてふさいでいます。長野県内の釣手土器は230例ほどありますが、底に孔が開いたものは上木戸遺跡と松本市小池遺跡の2例のみです。

釣手土器はその名のとおり釣手を掛け渡した鉢形の土器です。縄文時代中期には中部・関東地方を中心に作られ、灯火具として祭祀に用いられたと考えられています。祭祀に用いられた灯火具説を唱えた藤森栄一は、川上村の^{おおみやま}大深山遺跡の釣手土器に油煙が認められることから、ランプと推定したのですが、大深山遺跡の釣手土器を再検討した堤隆は、油煙の痕跡は認められないと述べています。そして、御代田町^{みやだいら}宮平遺跡から出土した釣手土器の外面に付着したススの状況から煮沸具であつたと指摘しています。



釣手土器手と底にあけられた孔

あつたと指摘しています。

釣手土器の底にある孔ですが、煮沸するには穴が開いていては困りますし、灯火具の燃料が油等の液体であればやはり不都合です。底に孔が開いた釣手土器は、104号竪穴住居の床上にほとんど完

全な形で出土しました。かつて、藤森栄一は釣手土器が特定の集落や住居跡から無傷で出土することが多いことから「考古学ミステリー」として釣手土器祭祀具論を展開しています。その後、釣手土器が破片で見つかる事例も増えていますが、釣手土器の出土点数は少なく、ムラの中で特定の竪穴住居で使われた土器であることは間違いないよ

うです。特殊な器である釣手土器の底に開けられた孔の意図は何なのでしょう。

当館の所蔵品に、木造の五重塔を模した平安時代の瓦塔^{がとう}（長野市篠ノ井遺跡群）があります。屋根の角と1階の開口部の上下に直径5mmほどの孔がいくつも見られます。その孔は扉や風鐸^{ふうたく}を付けるための孔と考えられます。扉は木製などの朽ちてしまう材質であつたのでしょう。孔の存在から開閉できる扉が付いており、中に仏像のようなものを入れて、扉を開けて中の物が見えるようにしていたことが想定できます。孔の存在から、どのように瓦塔が用いられていたのかを復元できます。



扉と仏像は推定復元



上から孔を見る

さて、上木戸遺跡の釣手土器の孔は土器底の周縁部にあけられています。底部は中心部がやや高く周縁部が低くなっていることから液状のものを外に出すための孔と推定することが可能です。孔には栓がされていたと考えています。釣手部分は吊るすための紐が燃えないための防火機能をもつと考えられていることから、実際に紐でつるした場合もあったと思われます。吊るしたまま、油などの液体を抜き取るための孔と考えていますが、皆さんは、何のための孔だと思いますか。

(鶴田典昭)

参考文献

- 藤森栄一 1965「釣手土器論」月刊文化財19号
- 綿田弘実 1999「長野県富士見町札沢遺跡出土の釣手土器」長野県立歴史館研究紀要5号
- 堤 隆 2019「3つの釣手土器-大深山遺跡の事例から」佐久考古通信No.170
- 中村耕作 2019「釣手土器とは何かー縄文文化理解における意義ー」佐久考古通信No.170

満洲建設勤労奉仕隊手帳

長野県からの満洲移民は3万数千人で日本一であるということはよく知られています。ただ、その満洲移民政策の一環として短期的に満洲に渡った人びとがいたことについては、あまり知られていません。「満洲建設勤労奉仕隊」の制度は1939（昭和14）年に創られました。満洲建設勤労奉仕隊には、一般開拓団班、特設農場班、開拓応援作業班等があり、開拓団の労力補充、食料増産活動などを行いました。2021（令和3）年に当館に寄贈された「鷹野幸助満洲建設勤労奉仕隊資料」は、東安省宝清県宝清特設農場で勤労奉仕を行った鷹野幸助氏に関わる資料です。鷹野氏は長野県小県郡塩川村出身で塩川青年学校研究科2学年でした。1940（昭和15）年7月10日に長野で壮行会を行い、茨城県内原義勇軍訓練所河和田分所で訓練後、同月27日に満洲の現地農場に着きました。寄贈資料中の「昭和十五年満洲建設勤労奉仕隊手帳」には、滞在中の日記が記されています。

「七月廿九日曇霜 午前五時起床 直二洗面 朝の礼拝 朝食 本日食事當番勤務 八時半ヨリ作業 水田除草「小雨降ル」 正午中食 三時マテ后睡 三時ヨリ作業 水田除草 七時夕食 九時半消燈ス」などとあり、農場での基本的な1日の過ごし方が想像できます。続く7月30日の日記には「八時ヨリ教練 小銃の操法ヲ受ク」とあり、農作業の勤労奉仕だけでなく、軍事教練も行われていたことがわかります。さらに7月31日の日記には「(午後) 八時ヨリ衛兵勤務 表門歩哨」、8月1日の日記で「昨日午后八時ヨリノ衛兵勤務ノ續日 夜ルノ歩哨ハ心サビシイ 午后八時衛兵交代」とあり、24時間の過酷な任務中の夜の心細さが綴られています。

その後の日記によれば8月14日から20日まで休養、「醫師の診断」「便の検査」を受けたとあり、どうやら深刻な体調不良に陥ってしまったようです。また、8月21日には隊員の「水上、松澤 両君(県カ)ノ口有会葬…遺骨ハ即日故郷ニ向ケ出発ス」、9

月7日に「富士原君ノ縣葬有全隊員出動ス」などとあり、勤労奉仕隊員から死者が出ていることが読み取れます。これらの事実から、満洲での奉仕隊活動が死と隣合わせであったことが伺われます。

東安省宝清県はソ連国境近くで、特に開拓団が集中していた地域でした。同地区の索倫河下水内郷開拓団で9月16日から18日まで勤労奉仕を行ったこと、9月20日、万金山高社郷開拓団へ見学に行ったことも記されています。22日「フトン、毛布ヲ本部ヘカヘス、本日ヲ以テ奉仕ヲ終リ農場ニワカレヲツゲル」とあり「農場発八時二十分、信濃村着六時半頃」と続くことから、帰国前には信濃村開拓団も訪問していたこともわかります。

「勤労奉仕」というと純粹に開拓団ための労力補充、食料増産活動のみに従事したと思いがちですが、実際には軍事教練を行い、開拓団の慰問、視察などの大陸政策への認識を深める活動もおこなっていました。国や県が期待したのは国策「満洲移民」を忠実に推進し、自らも命をかけて大陸に骨を埋めようとする人材だったようです。この一冊の手帳を通して、開拓団だけにとどまらない「満洲移民」の多様な歴史的一幕を考えを巡らせることができることでしょう。（大森昭智）



昭和十五年度満洲建設勤労奉仕隊手帳（当館蔵）



縄文時代の食料保存について



豊富な魚介類に恵まれた海辺とは異なり、食料資源が限られる内陸の縄文人が大集落を維持し、かつ繁栄することができた要因の一つとして、秋季の集中的な食料獲得と貯蔵の工夫が考えられます。そこで今回は、食料保存について考えてみます。

堅果類の保存

縄文遺跡の発掘調査によって出土する植物遺体には、時期的な変動があるものの、コナラ、トチ、クリ、クルミなどの堅果類^{けんか}が多くみられます。堅果類の獲得エネルギー値は意外に高く、100 gあたりのカロリー量は、コメの338 kcalに対してナラはほぼ同じ、トチとクリがその半分、クルミは約2倍になるため、貴重な保存食料でした。明治初年の奥飛騨地方の地誌『斐太後風土記』によると、赤桶村では堅果類を採集することで必要エネルギーの約8割を獲得し、生計を維持していたといわれています。

さて、縄文時代後期の水さらし場状遺構がみつかったことで知られる中野市栗林遺跡では、谷部に78基もの湿地型貯蔵穴（水がしみ込む形態の貯蔵穴）が集中し、うち23基には実際に貯蔵されていたクルミ（オニグルミ・ヒメグルミ）が残っていました。また、近年佐賀県東名遺跡^{ひがしなま}では、前期の湿地型貯蔵穴からイチイガシなどの堅果類が見事な編み籠に詰められて出土しました。実がばらばらにならないようにまとめて水に漬けることによってゾウムシなどの加害を防ぎつつ、短い間保存したものと考えられています。一方、岡谷市花上寺遺跡^{かじょうじ}の縄文時代中期の堅穴住居跡からは、表皮がほとんどなく、皺^{しわ}が寄った渋皮だけが付い



写真1 栗林遺跡の貯蔵穴剥ぎ取り（当館蔵・常設展示）

た大量のクリがでみつかっており、クリを煮てから干して、貯蔵した可能性が報告されています。この他、屋根裏に乾燥させながら貯蔵する民俗例もあり、堅果類の種類や地域による貯蔵方法の違いに注目していく必要があります。

サケ・マス類の保存

秋に豊富に捕れる資源といえば、アキアジともいわれる鮭も見逃せません。平安時代の法典『延喜式』によると、信濃国は越中・越後とならぶ鮭の産地で、鮭の内臓を取り除いて天日干しした「鮭^{すわやう}楚割^{そわり}」などの加工品が都への貢納品となっていました。遡って縄文時代には「サケ・マス類」^{※1}の椎骨や歯などが、東日本から北海道を中心におよそ200の遺跡から出土しています。通常は骨が細かく砕けるために発掘では見つけにくいものの、千曲市屋代遺跡群では縄文時代中期後葉の1間×1間の掘立柱建物跡の地床炉とその周辺から、515片の椎骨と17点の歯が発見されました。付近には天日干しのための竿列^{さお}の跡とみられるピット群もみつかっています。これらの状況から、この建物をサケ・マス類を長期保存するための燻製づくりの施設と推測しました。



写真2 屋代遺跡群出土のサケ・マス類の椎骨片
（当館蔵）スケールの目盛りの幅は1 mm

屋代遺跡群も含め、遺跡から出土した骨や歯は白くなるまで被熱しているものが多く、その背景として食後に火に投ずる儀礼説がありますが、燻製にした骨部分をスナック状にして食べるためにさらに焙った結果とも考えられます。いずれにしても8 kgにもなる大形の川魚は貴重な栄養源であり、その解体道具も含め、利用の実態を今後も追究していきたいと思います。（水沢教子）

※骨からはサケかマスを含め、詳細な同定はできない



INFORMATION

インフォメーション

■ 2022(令和4)年 12月～ 2023(令和5)年 3月の行事予定

12月

休館日
5・12
19・26
28～1/3

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、講座・イベント等につきましては、状況により急遽中止とさせていただきます。

講座・イベント

近世史セミナー
12月3日(土)

特設考古学講座②
12月24日(土)
テーマ：石器を調べてみよう

1月

休館日
～1/3
10・16
23・30

冬季企画展

高遠藩の遺産

—最後の藩主が残したもの—

1月14日(土)～2月26日(日)

■講座(兼 信州学講座④)

1月28日(土) 13:30～14:45

講師 大澤佳寿子氏

(伊那市教育委員会学芸員)

演題「内藤家が地元に残したもの」

定員 80名(事前予約制)

■講座(兼 信州学講座⑤)

2月18日(土) 13:30～14:45

講師 小池勝典氏

(宮田村教育委員会学芸員)

演題「厩稲荷の奉納品」

定員 80名(事前予約制)

■小展示室

「池上典氏 高遠城再現図・展覧図展」

■【期間中同時開催】

常設展示室横廊下(パネル展示)
「千曲川・梓川はこう変わった—江戸・大正の絵図地図が伝える—」
(歴史的水害史料活用研究会主催)



県立歴史館・KOAの日

1月21日(土)

歴史館無料開放・体験イベント

特設考古学講座③

1月21日(土)

テーマ：縄文時代・弥生時代の骨を調べてみよう

2月

休館日
6・13
20・24
27・28

春季企画展

至宝の名品

学芸員が語る長野県立歴史館
所蔵品展 古文書編

3月18日(土)～5月28日(日)

県立歴史館の信州学講座⑥

3月11日(土) 13:30～

「近世信濃の城と城下町—発掘調査が謎を解く—」



表紙写真の解説

高遠城再現図 1・総構東方図(部分)
(池上典画 伊那市立高遠町歴史博物館蔵)

伊那市出身の空間デザイナー池上典氏による高遠城の再現図です。城の惣構が解ることが重視され、地形の広さ、高低差、奥行等を正確に表すことができる鳥瞰透視図技法が用いられています。三峰川を見下ろす高台に高遠城があり、その後ろに月蔵山がそびえます。遠くに南アルプスを望む景観が描かれた美しい再現図です。 ※冬季展中、小展示室に展示

行事アルバム

***** 歴史館で夏休み *****



8月11日(木祝)、「歴史館で夏休み」には、子ども・大人を問わず多くの方にご来館いただきました。今年は、昨年ご好評いただいた「どきもドキ」(土器レプリカマグネットづくり)と、「ワードパズル」を企画しました。

新型コロナウイルスの感染状況から、土器レプリカは販売のみとなりましたが、ワードパズルには57名の子どもたちが参加して、謎解きを楽しんでくれました。

***** 夏季企画展 *****



7月9日(出)から8月21日(日)まで、夏季企画展「山伏—佐久の修験 大井法華堂の世界—」を開催しました。当館へ寄贈された、

中世文書40点を含む4400点余りの一大文書群である大井法華堂文書を中心に、中世佐久の大井氏の動向、信州の山岳信仰や修験道との関わり、江戸時代の法華堂の隆盛などを展示しました。当企画展には、延べ4078名の方がご来館されました。

*** 遺跡探訪会(オンライン配信) ***



今年の遺跡探訪会は、初の試みとしてオンラインでの実施となりました。やはり、現地の雰囲気・スケール感を、実際に目で見て、触れて実感していただくのが一番ではありますが、感染症対策として今できることを、歴史館として模索しています。この経験をまた、今後の取り組みに生かしていきたいと思ひます。

長野県立歴史館たより 秋号 vol.113

2022(令和4)年12月2日発行
編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: https://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社